

ハガルの神——あなたこそエル・ロイ  
(わたしを顧みられる神)

創世記第 16、21 章



司祭 ヨハネ 井田 泉

2006 年 8 月 7 日

日本聖公会人権セミナー

(京都教区センターにて)

新約聖書の最初、マタイ福音書は次のように始まります。

**「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを……」 1:1-2**

この系図によれば、イエスの祖先はアブラハムであり、次いでその息子イサクの名が挙げられて、はるかに下ってマリアの夫ヨセフに至っています。けれども創世記は、アブラハムにはもう一人の年上の息子があったことを記しています。イシュマエル。アブラハムの正妻サラの女奴隷ハガルが産んだ子どもです。

アブラハムの父テラはチグリス・ユーフラテス川のほとり、カルデアのウルに住んでいましたが、何か理由があって家族を連れて川を西に遡り、ハランで亡くなりました。アブラハムはそこで主の声を聞いて、家族、一家を率いてカナンの地にやってきます。

神は二つの約束を彼に与えておられました。一つは定住の地を与えるということ。もう一つは子孫を増し加えるということ。しかしいずれも容易には実現しませんでした。アブラハムとその一族は何度も天幕を移し、ようやく今のエルサレムからずっと南西の方、ヘブロンヘブロンの北にあるマムレマムレに一応の落ち着き場所を得て暮らしていました。

異民族の間に暮らすことになったさすらいの一アラム人（「滅びゆく一アラム人」申命記 26:5）であるアブラハムと妻サラにとっての深く重苦しい悩みは、いつまでたっても子どもが与えられないということでした。神の約束はほんとうに確かなのか。自分たちはこのような異国に来て、ここで滅びてしまうのではないか、という不安がたびたび夫婦を苦しめました。サラはそこで当時の習慣に基づいてある決心をし、夫に提案します。

創世記第 16 章 1-5 節。

「わたしが不当な目に遭ったのは、あなたのせいです」(5) とサラは夫に訴えています。「不当な目」と訳された言葉はヘブライ語の「ハーマース」という言葉で、「暴力」「暴虐」とも訳されます(エレミヤ 51:35)。violence! と、助けを求めて叫ぶときに用いられる言葉だそうです。サラは自分が受けたことを不当な暴力と感じ、夫アブラハムに、また神に正当な裁きを要求しました。

#### 16 : 6-12

しかしここから聖書記者の関心は、家を飛び出したハガルに注がれます。ハガルはサラの仕打ちに耐えられなくなって逃亡しました。お腹に赤ちゃんを身ごもったまま、ただひとり遠くまで行きました。

「シュル街道に沿う泉のほとり」とあります。シュル街道はエジプトとの国境に至る道です。ずいぶん遠くまで行ったのです。疲れ果てました。だれも知った人はなく、何のあてもありません。のたれ死にの危険があります。

そこで人に出会いました。誰かが「彼女と出会って」(16:7)。これは偶然であったともとれます。しかし「出会って」と訳された言葉には「見出す」という意味もあります。「探し求めて見出した」とも読める(ヨハネ 9:35。イエスが生まれつき目が見えなかった人を探し見出されたのと同じ「ヘウリスコー」が旧約聖書のギリシア語七十人訳で用いられている)。主語は「主の御使い」です。

主の御使いは彼女を捜し、見出し、出会われた。9、10、11 と 3 回連続で「主の御使いは言った」と繰り返されている(7-8 節も含めれば 4 回) ことに注目しましょう。

神はハガルを絶対に放置せず、彼女が生きる道をはっきりと示し、約束を与え希望を示されるのです。

ところで「主の御使い」とは、ここでは人の姿で現れた神ご自身で

す。それは 10 節で分かります。「わたしは、あなたの子孫を……」

**「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。  
その子をイシュマエルと名付けなさい。主があなたの悩みをお聞き  
になられたから。」 16:11**

ここでは、人間の姿をした神ご自身が存在して語っておられます。主人からその存在を軽んじられ、否定される扱いを受けたハガルのおなかの子を、神が愛し、その存在を貴いものとし、その子の将来を祝福しておられます。

「エル」とは神の意味。イシュマエルとは「神が聞かれる」という意味です。神がハガルの嘆きと祈りを聞かれたのです。この子イシュマエルの存在そのものが、神が人の嘆きを聞かれるということを証しするものです。

ところでイシュマエルの将来について語られた言葉は、それにしては異様な気がします。

**「彼は野生のろばのような人になる。  
彼があらゆる人にこぶしを振りかざすので  
人々は皆、彼にこぶしを振るう。  
彼は兄弟すべてに敵対して暮らす。」 16:12**

これはひどいと感じられるかもしれません。しかしクラウス・ヴェスターマンというドイツの神学者はここをこう訳しています。

**「彼の手はすべての人に逆らい、すべての人の手は彼に逆らうでしょう。そして彼は、その兄弟すべてに向かい合って住むでしょう。」**

これは幼子イエスについて言われた言葉と通じていないでしょうか。生後 40 日、マリアとヨセフはイエスをエルサレムの神殿に連れて行って礼拝し、神に献げました。その時、シメオンという老人に会い

ました。シメオンは幼子を抱き、神を賛美して言いました。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」ルカ 2:29-30

その後、シメオンはマリアにこう言うのです。

「シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。『御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。』」ルカ 2:34-35

幼子イエスは、やがて成長して、多くの人を倒したり立ち上がらせたりする。反対を受けるしるしとして定められている。人（軽んじられ、抑圧された人々）を愛されたイエスは、そのことによって人（力を持った人たち）に逆らい、人の反感と憎しみを受け、抹殺されることになりました。「反対をうけるしるし」。

イエスさまはファリサイ派に逆らった。律法学者に逆らった。神殿警察に逆らった。大祭司に逆らった。ローマ総督に逆らった。民衆を愛し、その人権（その人の貴さ）を擁護しようとされたからです。

イシュマエルは人に逆らい、人は彼に逆らう。見ようによってはイエスとまったく一致しています。

キリスト教は愛の宗教であり、世界と人々の間に和解と平和をもたらすはずののだと言われます。そのとおりでありたいと願います。しかし、愛や平和や和解という言葉の陰で、不当な現実が黙認されてしまうことがあります。言葉、態度、振る舞いその他によって、ある人が深く傷つけられ、押しつぶされるようなことが起こったとき、そのような人にとっての正義、そのような人にとっての平和を正面に

据えず、単に双方に和解を求めるとすれば、それは被害者を沈黙させ、抑圧する暴力です。正義が回復されてこそ和解が現実になるのです。

ハガルの話に戻ります。

創世記 16 : 13-16

ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ（わたしを顧みられる神）です」と言いました。「顧みる」の中には、「見る」という直接的な行為が含まれています。神はハガルの現実を、ハガル自身を、イシュマエル自身をご覧になったのです。直接にはっきりと見た。見たから、ハガルとイシュマエルを守ろうされた。希望を約束してその人生を前に向かって歩み出すようになされたのです。「顧みる」という大事な言葉があいまいにならないように、抽象的にならないようにしたい。事実を見る、現実を見る。神が見られたのだ、ということをおぼえましょう。

神がハガルを見られた。そしてハガルも神を——人の姿をした神を見ました。見続けていました。ヴェスターマンはこう訳しています。

**「本当に、私は神を見た、彼が私をご覧になった後に！」**

神を見るということが、葛藤、迫害、孤独、危機の中で起こったのです。

ハガルは御使いの言葉に従ってサラのもとに帰りました。

それから時が流れ、サラは子どもを産みました。イサクです。アブラハムとサラにとってこの上ない幸福が訪れました。しかし一家の中に新しい問題が生じました。イサクの乳離れの日に、アブラハムは盛大な祝宴を開きました。イサクは3歳前後でしょうか。ハガルの子、イシュマエルがイサクと戯れているのをサラは見ました。

21:9-13

ハガルとイシュマエルは家から追放されます。

「アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた。ハガルは立ち去り、ベエル・シェバの荒れ野をさまよった。」 21:14

ある訳を見ると、アブラハムは「子どもを彼女の肩の上に乗せて別れを告げた」となっています。ヘブロンからハガルはイシュマエルを背負ってあてもなく南の方、ベエル・シェバの荒れ野をさまよいました。水はなくなり、道に迷い、助けてくれる人はおらず、子どもは渴いて死のうとしています。

ハガルはイシュマエルを灌木の下に寝かせました。この子が死んでいくのを見るに耐えられなかった。

「『わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びない』と言って、矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込んだ。彼女は子供の方を向いて座ると、声をあげて泣いた。」 21:16

ハガルが泣き、子どもが泣きました。

その時、声が聞こえました。

「神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。

『ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする。』

神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた。

神がその子と共におられたので、その子は成長し、荒れ野に住んで弓を射る者となった。」 21:17-20

かつてハガルをご覧になった神は、今度はイシュマエルの泣く声を聞かれました。泣く声を聞いて神は黙していることができない。ハガルに呼びかけ、その子の命と将来の責任を神が引き受けると言われます。神が立ち上がって働いてくださるので、ハガルはイシュマエルを抱き上げて、腕でしっかり抱き締める。勇気を出して、この絶望的と思われた現実を引き受けるのです。神を信じて、現実を引き受けて生きる。主体的な信仰の生き方がここで始まります。

その時、目の前に水のある井戸があるのにハガルは気づきました。神がハガルの目を開かれたのです。ハガルはイシュマエルに水を飲ませ、彼女も飲み、息を吹き返しました。

**「神がその子と共におられたので、その子は成長し、荒れ野に住んで弓を射る者となった。」 21:20**

神はその子イシュマエルと共におられました。神の守りと導きのうちにイシュマエルは成長しました。そうとすれば「**荒れ野に住んで弓を射る者となった**」というのは、単に狩猟を<sup>なりわい</sup>生業とする者となったということ以上のことかもしれません。神の働きを担って、彼は悪しき力を見定め、それを射貫いて退ける者となったとも想像されます。

ハガルとその子イシュマエルの存在を貴いものとした。神がハガルとイシュマエルを貴いものとし、そのいのちを守り、生きる道を開かれました。そしてハガルとイシュマエルも、神の守りのもとで自らの人生を神と共に切り開いて歩いていったのです。

**「イシュマエルは荒れ野に住んで弓を射る者となった。」**

比喩的に理解することが許されるなら、今日も、この大地と社会と人の魂を荒廃させる力に対して、弓を射ることは神の業と思えます。